

宗田一先生と京都の医学史研究

日本医史学会常任理事 杉 立 義 一

思えば二十数年間、京都の医学史研究の大部分を宗田先生のご指導をうけて、行を共にしてきた筆者にとつて、先生の追悼文を草することは、現世の無情を感じずにはいられない。

初めて先生にお会いしたのは、昭和三十七年五月二十七日、旧京都府医師会館で関西支部主催で行なわれた山脇東洋没後二百年記念会の時であった。この会では小川鼎三先生、田中助一先生の講演と三十数点に及ぶ資料展示があり、宗田先生はその裏方として、会の実務に当っておられた。その場のスナップ写真を見るとお若い姿がうつつている。先生は既に昭和二十九年頃から『日本医史学雑誌』や『医譚』に論文を発表されており、学会の評議員であった。

先生が京都府医師会主催の医学史関連事業と直接かかわるようになったのは、昭和五十年四月四日から府立総合資料館で行った『京都の医学史展』の開催準備においてであった。

先生を府医師会に直接推薦されたのは太田典礼先生であった。京都府野田川町出身の太田先生は小川鼎三先生、緒方富雄先生と三高で同級であり、東京に古医学資料センターを創設して医史学啓蒙活動を続けておられた。

たまたま昭和五十年四月、第十九回日本医学会総会が京都で開催されるに当り、医史学会々長に決定していた阿知波五郎先生が持病の悪化により辞退されたため、急遽中野操先生が会長となられ、大阪市で医史学会が開かれることとなった。太田先生はせめて展覧会だけでも京都でやらねばと力説されて、宗田先生を府医師会員に紹介されたのが実情である。その結果守屋正先生を委員長として、『医心方』仁和寺本をはじめ、二百数十点の資料を集めた大展覧会を開くこ

とができた。その企画、出品物の選択等の準備万端につき、事務局の坂上俊之氏と共にたびたび宗田先生のお宅同じ西京区桂で拙宅から徒歩数分の距離)に伺った。書物がうすくつまれた廊下、階段を上がって書斎に入ると、フアイルが整然とならび、必要な資料はいつでも出せるように整理されているのに敬服した。会期中、小川鼎三先生と武見太郎先生との対談が持たれたが、小川先生が時間をすぎても資料館に帰られないので、青医連にとり囲まれているのではないかと、宗田先生をはじめ一同心配していたところ、小川先生がひょっこりお帰りになられたことをなつかしく思い出す。この展覧会実施がその後の京都の医学史研究の起点となった。

順正で開かれたその打ち上げパーティの席で、小川先生が東洋の記念碑を観臓の地に建てたらどうかと提案された。また宗田先生のお智恵をかりて顕彰会を作つて、翌五十一年三月七日、六角獄舎跡に観臓記念碑を建立した。ついで翌五十二年九月二十五日には賀川玄悦顕彰碑を玉樹寺に建立除幕した。

このように府医師会内で医学史研究の機運が盛り上つてきたので、この機会に京都の医学史の通史を編纂しようという議が決定され、十一名の医師会員が分担執筆することになったが、特に宗田先生には編集顧問として編集室員に加わつていただいた。全体の構成、章立て、史料の探索等、先生の御助力で進み、予定をはるかに超えて「本文編」千五百頁、「資料篇」七百頁の大冊ができた。先生は書物の編集には豊富な経験をお持ちで、出版社との交渉、販売体制の確立をうまくまとめていただいた。幸い本書は毎日出版文化賞特別賞を受賞することができた。

このあと府医師会の専門医会的存在として、同時に日本医史学会の支部的機能を持った京都医学史研究会を、五十五年十月に創立したが、先生は当初より顧問としてご指導をいただいた。毎月一回の例会は本年三月で百五十回を迎えたが、なかでも昭和六十年七月から平成六年十二月まで、阿知波五郎先生著の『近代日本の医学』、『医史学論考』を教材として、毎例会ごとに四十一回にわたり解説をしていただき、阿知波医史学を研究会員に理解させる大きな力となった。また五十八年から会誌『啓迪』を毎年発行しているが、先生は毎号寄稿して下さった。

先生が四十年間に発表された著書・論文は膨大なものである。初期は薬学史、本草学に関するものが主であったが、次第に関連領域へと拡がっていった。いずれも記述が極めて緻密で、系統的である。これは確実な資料に基づくからであらう。さらに近年の特徴として、従来の定説を補訂する論文が目につく。これは学問に対する信念と決断なくしてはできないことである。

筆者個人としては師とも兄とも思つてご交際を願つてきたが、一昨年暮頃から何か先生の体力の衰えが感じられ、ご忠告したこともあつた。

昭和五十二年以来、毎年三月上旬には研究会有志が山脇東洋観臓記念碑への献花と誓願寺墓地に参詣を行つてきた。先生も毎年必ずおいで下さつた。今年三月九日でちょうど二十回を数えた。研究会の公式行事として先生にお目にかかる最後となつた。観臓記念碑の台石には先生の撰文になる次の銘文が刻んである。

近代医学のあけぼの 観臓の記念に

一七五四年・宝暦四年閏二月七日に山脇東洋（名は尚徳・一七〇五—一七六二）は所司代の官許をえて、この地で日本最初の人体解屍観臓をおこなつた。江戸の杉田玄白らの観臓に先立つこと一七年前である。

これが実証的な科学精神を医学にとり入れた成果のはじめで、日本の近代医学がこれからめばえるきっかけとなつた。東洋のこの偉業をたたえらるとともに、観臓された屈嘉の霊をなぐさめるため、ここに碑をたてて記念とする。

一九七六年三月七日

来年以降もこの碑への献花をつづけて、先生をお偲びすることとする。長い年月、医史学研究の道を走りつづけてこられた宗田先生、今はただすべてを超越してお休み下さい。

（合掌）